

コウノトリ湿地ネットニュースレター



4号 2009年7月1日発行
コウノトリ湿地ネット
豊岡市城崎町今津1362
電話 0796-20-8560



戸島湿地に降り立ったヒナ2羽



6月11日午前6時21分
飛立つ戸島ヒナ(オス)

今年も2羽が巣立ちました。

昨年に引き続き、戸島の巣塔から、6月9日、11日と2羽が巣立っていきました。今年の戸島はヒナが他のコウノトリに襲われるという思いがけない事件がありました。2羽が無事に巣立つまでは、はらはらどきどきの毎日でしたが、湿地ネットのメンバーや、市の応援で巣立ちまでを見届けることができました。

今年はまだ巣立っていない伊豆の3羽を含め、豊岡盆地で9羽が巣立つ予定です。増え続けるコウノトリたちが生き抜いていけるように、湿地ネットは全力をあげる決意です。

(パタパタ編集長 宮村さち子)

今年のコウノリの繁殖

今年のコウノリの動きにはこれまでにない、様々な問題を投げかけるものがありました。これからの野生復帰の道のりはどのように進めばいいのか。私たちに鋭く問いかけてきているようです。

「遠くの存在」から「厄介な隣人」へ—もう、きれいごとではすまなくなった—

コウノリ湿地ネット副代表 佐竹節夫

ヒナ襲撃事件顛末記

5月15日午前8時30分のことです。「ヒナが襲われた！今度はしつこく突かれ首を挟まれている」喫茶店でのかき氷を飲んでいた私の携帯電話に森さんの悲痛な声が届きました。ハチゴロウの戸島湿地管理棟に出勤した彼女は、8時25分にコウノリのヒナ襲撃を目撃するや居合わせた工事関係者に応援を求めて巣下に駆けつけ、襲撃者(1羽)の攻撃をやめさせ追い払ったとのこと。



ヒナを襲うコウノトリ

現場に着いたのは9時前だったか。20分以上経過しているが、巣にはヒナの姿が見えません。恐らく3羽ともショックで伏せているのだろうと想像し、南東の山に登って巣内を見ることにしました。湿地の南側の田んぼに「犯人」らしき2羽のコウノトリがいるのを横目に、急な山を一気に登ります。観察地点でフィールドスコープをセットし、覗いて見た光景は、まさに阿鼻叫喚絵でした。ヒナ3羽の「死体」が重なるように横たわっており、1羽は無残にも逆向きになった羽を広げたままの状態です。スーと血の気が

下がったように感じました。



阿鼻叫喚

どうしてこんなことになったのか？ なぜ、ヒナを襲うのか？ なぜ、親鳥は巣を留守にするのか？ この事態をどう理解しているのか分からず、山中で一人混乱してしまいました。そして、最初の襲撃(5月6日)の後もそれらしき兆候があったのにすぐに監視体制を執らなかった自分に落胆し、この湿地の指定管理者になった私たちの会の管理責任を思いました。華々しく湿地がオープンしたばかりでヒナ目当ての来場者があるのに…。ここでの繁殖を核にラムサール条約に登録しようとしているのに…。早朝から監視さえしていれば…。次から次に悔やみと後悔が出てきます。

何度レンズを覗いてもヒナたちはびくとも動いてくれません。20分ほど経ったときでしょうか、父親が巣に戻ってきました。もしかするとヒナたちの反応があるのでは。しかし、父親はヒナの惨状に驚くでも体に触れるでもなく立っており、なんと2~3分後に巣から飛び去ってしまいました。その間、ヒナた

ちの動きは全くありません。私は、親鳥が瞬時にヒナが死亡したものと判断したのだなと解し、「ひょっとしたら」とのかすかな希望を捨て、下山することになりました。

下山途中、今度は母親が帰ってきました。見るとヒナの頭が動いているではありませんか。慌てて観察地点まで戻ります。レンズを通した巣では、2羽のヒナがよろけながらも母親に甘え、餌をねだり、何とか食べている様子が確認できました。やれやれ、2羽はどうにか生存している。

翌16日の雨は、こっぴどくやられた1羽の体温をことさらに奪ったようでした。17日7時6分、母親は巣の東端に横たわっているヒナに近づき、首を啜えて少し上に上げて放しました。ヒナは頭からダラリと落ちます。母親はもう一度同じ行為をした後、クルリと向きを変え、巣の反対側に歩くとどこかへ飛び去ってしまいました。観察していた私は、このとき、子の死を確認したのだなと確信しました。その後も何度か首を持ち上げる行為をしましたが、それは「我が子」に対する行為ではなく、「もの」を巣外に出そうとする行為であることが誰の目にも明らかでした。

ともかく、ヒナを守ろう

2度にわたってヒナを襲ったのは、戸島から約4.5km南にある赤石の巣塔で繁殖行動をしていたペアでした。(2度目は足環による個体識別ができませんでしたが、前後の状況を見ると、このペアであり、直接攻撃したのは2回ともオスであると断定していると思います)

このペアは4個を産卵し熱心に抱卵していましたが、40日経っても孵化の兆候がないため、コウノリの郷公園によって卵が除去(4/21)されました。結果は無精卵と腐敗卵でしたが、ペアにとっては繁殖行動の途中であり、遺伝子を残すことへの執着が強く残っていたのかもしれません。

それにしても、コウノリのヒナ襲撃をどう考え、どう対処したらいいのか。緊急会議の結果、①今後も襲われる可能性があるため、ヒナが巣立ちするま

では毎日6時から19時30分まで監視する。②研究者の方からも見解を聞き、考え方を整理する、ことを決めました。



玄武洞付近の電柱に巣材を運ぶ赤石ペア

①については、湿地ネットと市コウノリ共生課の職員で、2羽目が巣立ちした6月11日まで実施しました。巣の近辺には毎日のように他のコウノリ(ほとんどが識別困難)が飛来していましたが、親鳥は「もうドジは踏まない」とばかりに交代で巣に居ようになり、無事故で監視終了となりました。人間の方も、各自が「責任を持ちながらコウノリをじっくり監視」したことは、今後の活動に活かせる良い機会となりました。

問題は②です。今回投稿していただいた村田浩一先生(日大)の見解なども参考に、現段階で思いつくことを述べてみたいと思います。

豊岡盆地は、すでに飽和状態かも？

そもそも野生鳥類が他の巣を奪う、ヒナを殺すなんてことは繁殖行動の中ではよくあることなのか、あるいはほとんどもないことなんだろうか？

他の鳥類、例えばサギやフラミンゴでは繁殖期に見られるとのこと。彼らはコロニーをつくるので、そりゃ競争も激しくややこしいだろうなと。それに対し、「広範囲」なテリトリーをしっかりと持つ極東のコウノリの場合は、自分の巣とかなり離れた場所まで出かけて攻撃しなければなりません。そこまでしなければならぬ必要性って何だろう？ 2つの巣の距離が近すぎたか？ しかし、昭和9年の小坂地区では5kmの間に7つの巣があったと記録されています。4.5kmは決して近すぎとは言えないでしょ

う。

全て餌不足が原因と考えるとどうでしょうか。『赤石周辺には自身が生きていくには足りても複数のヒナを育てるだけの餌生物量が存在しない。餌をかき集めるため、テリトリーを拡大する必要がある。そこに戸島に大きな湿地が出来、いかにも餌がたくさんいそうだ、と赤石ペアは考える。ところが実際には、戸島湿地は出来たばかりで採餌環境が整うには至っておらず、そのため戸島ペアも巣を留守にしても遠くまで餌を探しに行かざるを得ない』このように推測すると、最初の繁殖に失敗したのでやり直したいペアと子育て真っ最中のペア、両方の気持ちが分かるように思うのです。

4年前にはハチゴロウ1羽しか居なかった豊岡盆地に、今や36羽のコウノトリが暮らしています。当会が常に訴えているように、個体の繁殖の勢いに対して採餌環境の再生が追いついていません。自然再生の緒についたばかりの豊岡盆地には、まだ多くのコウノトリたちの生息を支えるだけの力はないのです。

こう言うと、コウノトリの郷公園から「餌は足りている。だから餓死していないじゃないか」とのいつもの反論が聞こえてきそうです。しかし、生きものを生かすか死かだけで判断してはなりません。私たちは今

回のヒナ襲撃で次のような不安を増幅させました。「コウノトリたちは、死までは至らなくとも、既に体(心)が蝕まれ、行動に歪みが生じ始めているのではないかと」。

生々しい共生へ

繁殖力と餌不足、このアンバランスな中で、おそらく来年も繁殖するでしょうし、再来年になると50羽を超え、その後も…。1～2羽のコウノトリが田んぼに入っても理解を示されている農家だって、集団で田んぼに入ってくればさすがに黙っておれないでしょう。

私たちの不安が杞憂に終われば幸いです。しかし、座して見ているだけでは不安は的中してしまうと思います。道はひとつです。「コウノトリと暮らす」まちづくりを揺るぎなく続ける中で、餌場を1つでも多く造っていくことです。

今後、様々な事態がしょっちゅう起こり、田んぼではかつての「ツルボーイ」が復活するかもしれません。貴重で保護すべき鳥・コウノトリは、表も裏も見せる厄介な隣人にどんどん変貌していきます。だからこそ、野生復帰の取組みはこれからが本番なのです。「生々しい共生」段階に入り、共に楽しみ、共に苦しんでいきましょう。

— 今年の繁殖を振り返って —

兵庫県立コウノトリの郷公園 佐藤稔

百合地地区の人工巣塔から1羽の雛が5月24日、巣立ちました。野外での巣立ちは、3年連続。6月9、11日には戸島地区の人工巣塔から2羽が巣立ち、野上地区の電柱でも順調に育っています。7月には伊豆地区の人工巣塔からの巣立ちも予想され、昨年とほぼ同じ羽数の巣立ちが考えられます。豊岡に定着している野生コウノトリ・エヒメが放鳥コウノトリJ0405とペアになり産卵するという予想外の出来事もありました。まだ巣立ちしていない雛もいま

すが、今年の繁殖を、飼育担当者の目線で振り返ってみたいと思います。

各ペアの繁殖の特徴

全てのペアが営巣に人工物を利用しました。自然木で巣を造ったのは、死んだハチゴロウのみです。同じ野生のエヒメは、今年、ケージの天井で営巣、産卵しました。

人工物の営巣では、伊豆地区のペア(以下伊豆

ペア)が高圧鉄塔で巣造りしました。電力会社は、巣を撤去し巣造りを阻害する対策を取るなど対応に苦慮されました。人工物に巣を造りたがる原因として、①飼育個体による問題(人工物を利用する環境下で生活したことにより、人工物を好む鳥になった)②営巣木に適した樹木が少なく容易に自然木で営巣できる環境ではない③営巣に適した人工物が増えて自然木を利用する必要がない、などの理由が考えられます。コウノリの郷公園には、ひょうご元気松の苗木を植樹していますが、コウノリが営巣できる松に成長するには20年~30年かかると言われています。山の対策は、多くの時間、労力、経費を要します。作業は経験者でないと危険が伴い、簡単に解決できる問題ではありません。現状では、営巣木として使用できるスギやヒノキを樹形改良し、営巣を自然木へ誘導する方策が最善と考えます。自然木で育った個体は、自身の育雛環境に似た自然木を利用する可能性が高いと考えられます。

〔百合地地区の人工巣塔で繁殖しているペア(以下百合地ペア)〕

飼育下でも例がないほど産卵時期が早かったのが特徴です。初卵は、2月2日(推定)と雪が降る頃の産卵でした。孵化も3月11日と最高気温10℃前後で育雛には厳しい条件下でした。この厳しい環境が影響しているのか、抱卵日数や巣立ちが他のペアより長い傾向にあります。他の抱卵日数は、飼育下のデータと同じ31日前後です。しかし百合地ペアは、2日長く33日でした。若齢の雛の死亡率が高い事(死亡率75%)なども考慮すると、繁殖時期が早すぎ、抱卵、育雛するには条件が悪い可能性が考えられます。百合地ペアは、放鳥地域に定着させることを目的に給餌をしています。給餌で栄養状態が良いため、繁殖時期が早まっている事も考えられます。

〔赤石地区の人工巣塔のペア(以下赤石ペア)〕

4個の卵を産卵しましたが、孵化しませんでした。採卵して内容物を検査したところ、1個は無精卵で、他は腐敗して判別できない状態でした。繁殖能力

(生理的、行動的)は今後、原因を究明していきます。

※雌親の J0384は、昨年、午前中に J0391(戸島ペアの雄)と、午後は J0389と交尾するなど、私たちが知らないコウノリの一面を見せてくれました。

〔戸島地区の人工巣塔のペア(戸島ペア)〕



戸島 5月11日

順調に産卵、孵化しました。しかし、5月15日に赤石ペアと思われる個体に雛が襲われ、数日後に1羽が死にました。赤石ペアが悪いと言われる方もありますが、他の巣塔でも飛来して巣塔に着地しようとしたコウノリがおり、その都度、親鳥は撃退していました。今回は巣塔周辺から飛び去ってしまう戸島ペアにも問題があると思います。親鳥も経験し学習します。今回の経験を生かし、来年以降巣を空けないようになる事を期待します。

〔コウノリ保護増殖センターの進入路の電柱に営巣しているペア(以下野上ペア)〕



野上 右向け右! 6月2日

6月25日現在3羽の雛を育てています。雛は6月

下旬～7月上旬に巣立ちする予定です。昨年は、コウノリ保護増殖センターのケージ上で繁殖し、1羽の雛が巣立ちました。ただ、昨年の繁殖期には、兄妹婚の可能性が高まったために雄の J0290を飼育下に収容。雌の J0362は、直ぐに当時2歳の雄へ接近し(J0001)、繁殖活動を続けました。当初は無精卵と思っていたのですが、雛が孵化したので大変驚きました。雄親が、J0290又は J0001どちらか分からないのでDNAを用いて解析中です。今年も電柱に営巣し、撤去しても執拗に営巣を続けたため、電力会社の協力を得て、事故対策を施した電柱で営巣を継続させました。今回はあくまで特別な対策で、他では同様の対策は行わないとのこと。

[伊豆ペア]

当初高圧鉄塔に巣を造ったので、巣を取り払いました。その後は、営巣場所が定まらず、今期は繁殖しないかと思われた矢先、伊豆地区の人工巣塔で営巣し、4月8日に初卵を産みました。5月11日には最初の孵化を確認し、3羽が順調に育っています。7月中下旬に巣立ちしそうです。野上と伊豆のペアには、共通点があります。継続的な給餌が無い事です。時々雄親がコウノリの郷公園で採餌していますが、殆ど野外で餌を取り、3羽を育てています。巣塔近くの我が家のたんぼでは、年々生き物が増えていると実感します。畦の草刈りをする時、シマヘビを見かます。5年前にはタニシも見なかったたんぼは、カブトエビ、ホウネンエビが泳いでいます。環境の変化が、コウノリの繁殖に好条件と考えられます。

[エヒメ]

コウノリの郷公園繁殖ケージの天井で巣造りし、放鳥個体 J0405との交尾も確認できました。雛の誕生を期待しましたが、卵は J0405による遺棄やカラスによる捕食、持ち去りなどですべて失われ、抱卵段階に入りませんでした。「なぜカラスから卵を守らないのか」との意見も聞きました。理由は親鳥

が卵を守らない限り、人が卵を守るのは不可能なためです。重要なのは、なぜ親鳥が巣を空けてしまうのか？それは、エヒメと J0405の歪んだペア関係に起因します。通常ペアリングは、雌が雄に近づきペアになります。その意味で、相手を選ぶ選択権は、雌にあります。今回、エヒメは、繁殖相手として飼育個体を選択しました。当初エヒメは、コウノリ保護増殖センターのケージの上で巣造りを始めました。そのケージの飼育個体をコウノリの郷公園に移動したところ、センターの巣造りを止めてしまいました。エヒメはコウノリの郷公園でその飼育個体を見つけ、再びその個体がいるケージ上で巣造りを始めました。一方 J0405は、エヒメがコウノリの郷公園で巣造りする前から、別のケージで巣を造っていました。エヒメが営巣すると、そこに J0405が飛来するようになりました。その後、交尾も確認できましたが、それぞれの巣造りは継続され、産卵後も変化は見られませんでした。J0405は、抱卵などの繁殖行動に参加することは無く、エヒメが採餌のために巣を空ける度に卵は失われることが続き、結局10個産卵しましたが、すべてだめになりました。コウノリの繁殖は、夫婦共同で行わないと失敗するという見本のような例となりました。

今年の繁殖をみると、誰もが考えている以上に状況の進行が早いと感じられます。2年後には、野外で繁殖した個体が性成熟年齢に達し、更にペアが増加する可能性が高まります。人間側は、この増加ペースにどう対応するかが課題となります。野外で自活している J0363と J0403の雌2個体は、今年もカップルになれませんでした。特に J0408(雄)と J0403は、楽々浦からの放鳥後1年間は、2羽で福田地区を中心に野外で自活していました。自活カップル誕生と期待されましたが、J0408がコウノリの郷公園に居着くようになりました。コウノリの雄は、雌と比較し人的な餌への依存度が高いことが伺えます。また、ペアの多くは、コウノリの郷公園や保護増殖センターが出会いの場となっています。飼育個体などの刺激もあり、ペアリングでは、配偶

関係を深める環境が整っているようです。コウノリの郷公園・西公開ケージで放鳥個体が採餌するなどの問題もありますが、ペアリングにおいては、重要な場所となっています。

最後に、コウノリは、寿命の長い鳥です。飼育では、30年以上生存します。飼育より条件の厳しい

野外においても、20年～25年程度は生きられるのではと思います。今自分たちが判断していることが20年後も続き、影響を与える可能性があるため、今後に立ち向かうため、コウノリの郷公園職員一同、禪(ふんどし)を締め直して頑張り--ます。

コウノリとトキの野生復帰に関する諸問題

村田浩一 (IUCN/SSC/RSG/VSG(国際自然保護連合/種保存委員会/再導入専門家グループ/獣医師専門家グループ)委員、日本大学生物資源科学部教授)

【はじめに】

昨年9月に新潟県の佐渡島で放鳥されたトキ(*Nipponia nippon*)の雌4羽が、島を離れて本州へ飛び去ったことが新聞等で報道され話題になった。成長してから繁殖地とは異なる地域へ移動(分散)することは、他の鳥類でも知られている行動なので、とくに珍しく奇異なことではない。ただ、国内のトキに関しては、過去に同様な行動が見られたかどうか情報が欠けており、本種の興味ある生態として今後の動きに注目している。

本州へ渡ったトキを佐渡へ戻すべきかどうかについて議論することは余り意味がないように思う。そもそも鳥から見たランドスケープ(景観)はヒトと異なっており、当然のことながら地図上に示された県境や国境は彼らの認識範囲外である。しかし、島から本州への移動が予想外のことであった、という意見については議論すべきであると考え。もし、放鳥後に島での定着を関係者が期待していたとすれば、それは大きな誤謬である。さらに、厳冬期の給餌の是非を問う環境省専門家会合で提示された「給餌したら動物園となんら変わらず試験放鳥の意味がない」(2008年12月8日付産経ニュース)というコメントには、疑問を抱かざるを得ない。そのような情緒的な感覚でトキを野生復帰(再導入)したのであれば、最初から島への定着など望みようは無い。今回の放鳥における技術や方法が、

定着を目的としたものとは根本的に違っていたからである。科学的な再導入を試みている海外の専門家の間では考えられない選択だったと思う。

【再導入と動物園技術】

再導入計画が、動物園の技術なくして成り立たないのは、カリフォルニアコンドル(*Gymnogyps californianus*)やゴールデンライオンタマリン(*Leontopithecus rosalia*)の例を見ても明らかである。これらの計画における第一段階の放鳥や放獣では、定着のためにソフト・リリース(ある一定の期間、野外施設で飼育し当地に馴致させてから自発的に自然へ帰す方法)が選択されており、リリース後にも餌付けが行われている。野外飼育もしくは半自然化とも表現できる段階で、ある意味、専門家会合が否定した「動物園となんら変わらぬ」状態である。

野外飼育という実験過程では、再捕獲の技術は必須であり、当初計画が上手く進まなかった際には、捕獲して飼育下へ再収容しなければならない。それが「試験放鳥の意味」である。放たれた動物の生命力に全てを託し、ただ観察しているだけでは、あまりにも無策でサイエンスとしての再導入の技術向上は将来的にも望めない。

1990年代初頭、コウノリ(*Ciconia boyciana*)の再導入計画を立ち上げる時に、ヨーロッパと北米の

関連施設を調査した。ロサンゼルス動物園では、カリフォルニアコンドルを野外へ放つ前に、高圧電線回避のための学習やネットガンによる捕獲訓練を実施していた。シアトルのウッドランド・パーク動物公園では、再導入予定のゴールデンライオンタマリンが、昼間は園内で自由生活し、夕方になると巢内へ戻るように繰り返し訓練されていた。このように、海外では動物園が再導入計画と技術開発の重要な役割を担っている。豊岡のコウノリについても、繁殖に成功した背景には動物園からの技術移転があった事実を忘れていただきたい。最初に放鳥された個体も、動物園の繁殖個体が含まれていた。

【地域個体群レベルの保全】

トキやコウノリの地域個体群はすでに絶滅し、現在、放鳥されているのは大陸(中国やロシア)の系統である。ミトコンドリア DNA レベルで塩基配列の違いがわずかであるから大陸産と日本産は同じである、と判断するのは人間側の都合もしくは政治的判断に過ぎない。過去に日本に定着し繁殖を繰り返していた個体は、大陸で同様に繁殖している個体と個体群レベルで異なる存在である。現在、ゲンジボタル(*Luciola cruciata*)やメダカ(*Oryzias latipes*)のように地域個体群の国内移動でさえ生物学的に問題視されているように、現在、生物多様性を種レベルではなく地域個体群レベルで維持する努力がなされている。

ハブ(*Protobothrops flavoviridis*)駆除を目的として東京帝国大学の渡瀬庄三郎博士が奄美大島や沖縄島へ導入したジャワマングース(*Herpestes javanicus*)は、100年後の今、生態系攪乱要因となっている。当時は救世主の如く崇められた渡瀬庄三郎博士の仕事は、今となっては愚かな仕事と断じられている。トキやコウノリを野放図に野外で繁殖させ続けることが、100年後にどう評価されるのか心配である。

再導入は、ノアの方舟計画のように地域絶滅種を復元するのではなく、現存する地域個体群の回

復のためにのみ用いられるべき手法であると個人的には考えている。再導入の定義の中では、補充もしくは補強(re-inforcement/supplementation)にあたる。その際にも、補充される個体が飼育下で獲得した耐性菌や新たな病原体の感染源とならないような保全医学的配慮と、既存の生態系の攪乱要因にならないような保全生物学的配慮が求められる。

【湿地の保全とコウノリ】

放鳥されたトキやコウノリが果たしている地域の経済的活性化や環境教育的な意義を否定するつもりはない。しかし、海外から導入した個体を飼育下で繁殖させ放鳥に成功したことを地域個体群の復活であると誤解してはならない。コウノリの野生復帰計画が、あくまでも大規模野外実験であることを認識し、再導入個体を厳密に管理すべきである。すなわち、野外の環境収容力を超えない個体数を人為的にコントロールし、彼らが生息できる良好な環境づくりに重心を置くべきである。後者の重要性を考えると、コウノリ湿地ネットの活動方針は正鵠を射ている。大陸から渡って来るコウノリが自然に定着するには、絶滅までの年数と同等もしくはそれ以上の年数を要するかもしれない。だが、湿地の復元や回復に積極的に取り組めば、その年数は短縮されるであろう。

環境が改善すれば大陸から飛来し定着する可能性がある。放鳥個体は、そのための「生きたデコイ」的役割を果たす。2002年に飛来したハチゴロウがそれを如実に証明してくれたと思う。おそらく、1971年に絶滅した豊岡の地域個体群は、数百年から数千年前、大陸から飛来した個体が円山川周辺の湿地に好適な棲み場所を見つけて形成されたのであろう。私は、ハチゴロウからもっと多くのことを学ぶべきだと考えている。なぜハチゴロウが豊岡に飛来し、なぜ豊岡に定着し、なぜ豊岡で死んだのか。あえて言えば、死因が徹底的に究明されなかったことを残念に思っている。

【おわりに】

何度も書くが、再び豊岡の空を本物の野生コウノリが舞うためには、彼らの生息環境、とくに湿地環境を回復し維持する必要がある。いま現在、未だ豊岡にはその環境が十分に整っていない。だが、これまで行われてきた地域住民の活動や努力を考えると、コウノリが生息できる湿地の回復は、決して不可能な事業でないと感じている。

最後に、今年1月にコウノリ湿地ネットの招きで講演した時の言葉を再掲したい。

数十年後、数百年後に評価されるのはコウノリを野に放したことではなく、コウノリを含む多くの生物（ヒトも！）の相互関係や彼らが生息できる環境をよく理解し、その再生や復元や調和を試みた豊岡市民の地道な努力に対してだと思います。頑張ってください！

今年のコウノリはちょっと変？

湿地ネット会員 宮村さち子

今年も昨年に引き続き、4ヶ所でヒナが誕生し、次々と巣立ちを迎えています。

その中で、子育てにまい進しているコウノリたちを尻目に、時期遅れの営巣活動を始めた2羽がいました。J0002と J0408です。なんと彼らは、パチンコ店の駐車場すぐ横の電柱に巣材を運び始めました。巣塔の下は頻繁に車、人が行き来し、人間のほうから考えたら、とても、安心して子育てできる環境ではないと思えるのですが。その後、どんどん大きくなってきた巣は、電力会社により取り払われました。するとたちまち、その少し先の電柱に今度は巣材を運び始めます。そうして、3本目の電柱まで巣材運びは続きますが、そこで、巣作りは中止となりました。



電柱の上の巣



駐車場の横で2羽仲良く

私は、野生コウノリのハチゴロウがやってきた年から、コウノリの観察を続けています。（細々とはありますが）ハチゴロウの観察に当たっては、驚かさないように、観察の決まりを作ったりしました。50～100メートルは離れて観察する、驚かすような急な動作はしない、できるだけ車から降りないで、観察する等々です。人間の動きにとっても敏感で、ちょっと近づきすぎるとすぐに飛び立ってしまっていました。野生の鳥はそんなものだ、という固定観念があったのですが。

この、最近コウノリと人との距離がとても近くなったというのは、コウノリの観察を続けている仲間からも同じ感想が出ています。確かに今まででは考えられないような人とコウノリの距離になっているようです。我が家から続く通学路にうろうろしていた

り、道路すぐ横の田んぼで採餌していたりして、よく驚かされたのは上記の2羽です。野上のペアもやってくるカメラマンたちに警戒することなく、すぐ近くで採餌しています。去年と比べて明らかに距離が近い。これは餌を時々貰っているということもありそうですが。



通学路を散策中

かと思うと、野生の鳥らしい警戒心を持っている戸島のコウノリたちもいます。

このことは、何が関係しているのだろうか。一つには縄張りがあるのだろうか。J0002と J0408は、すでに子育てを始めているコウノリのペアたちの縄張りには入れず、その結果、どんどん、人の近くで、採餌するほか無くなっているのだろうか。

勝手な想像は膨らみます。でも、この調子で行けば、豊岡の空を飛ぶコウノリは順調すぎるくらい増えていきます。ここ豊岡がコウノリたちにとってどんどん狭くなってきたとき、どうやって生き延びるのか。中国のトキが、はじめは標高の高い山の方で採餌していたものが、数が増え、どんどん里のほうに降りてきて、人間の近くで暮らすようになったとのこと。トキの採餌場所はコウノリと重なります。コウノリたちは、このままの豊岡の環境では、人間から餌を貰い続けられないと生きていけなくなりそうです。私たちはこの事態にどう対処していったらいいのか。

一つには、昔の環境を完全に取り戻すのは不可能なことだから、自然再生のみではなく、人間の手によって、密度の濃い、餌環境(戸島湿地のような)を作り出してやる必要があるのではと思います。それには、常に人間の手を加える必要があるし、完全に野生復帰が達成されるまで、常に人間の干渉が必要であると思われます。人間とコウノリとの距離が近くなっていくことは、必ずしもいいことばかりとは言えません。危険も充分にはらんでいると思えます。野生復帰は、人間との間に、画然とした距離を保ってこそ実現する、と言えるのではないのでしょうか。

コウノリは人間のペットではないのだから。

今戸島湿地では…

ハチゴロウの戸島湿地のいたる所でミズアオイが元気な姿を見せています。本種は、環境省により絶滅危惧Ⅱ類に指定されている希少種で、近畿では出石～円山川下流域でしか見られません。戸島湿地では、2005年のハチゴロウとのコラボレーションが記憶に新しいところです。よし、あのとき以上に湿地一面お花畑にしてやろうと、せっせと雑草除去作業を開始しました。ところがです。6月下旬から1本2本と開花しだし、写真のような状態になってきました。本来の開花時期は9月上旬のはず。なぜ？また、疑問が増えました。





クワイ湿地

私たちは2005年9月の第1回コウノリ放鳥以降、放鳥コウノリのモニターを行ってきました。その中でモニターみんなが一致したのは、コウノリのための十分な餌場が今の豊岡にはないのではないかという思いでした。特に冬雪が降り積もったら餓死するのではないかと心配しました。しかし、コウノリたちは私たちのそんな心配をよそにコウノリの郷公園内公開ケージ内の給餌を上手に利用しながら冬を乗り越え、繁殖にまでこぎつけました。

それでも、私たちの思いはかわらず、2006年秋コウノリの郷公園に近い下宮集落の休耕田をかりて湿地づくりを開始しました。コウノリたちの反応はすばやく湿地ができそこに餌がある限りやってくるようになりました。(冬の間だけに限り、少しですが継続的給餌も取り組んでみました)

手ごたえをつかんだ私たちは自分たちが作った湿地の名前を「クワイ湿地」と名づけて、少しずつですが規模を広げながら維持管理をしてきました。

ゴールデンウィークの湿地作業

今年の4月クワイ湿地の畦の補修作業をしていると地元の方が寄ってこられて、「うちの田んぼ(休耕田)を使っていいよ。草刈ぐらい手伝うから」と声をかけてくださいました。その田んぼは山裾の細い水路があって山と直接繋り適度な大きさで、自分たちがぜひ湿地にしてみたかった田んぼでした。そこで、みんなの了解をとってから地主の方のご好意を受けることにしました。

湿地作業は今年のカエルの産卵にまにあうように、ゴールデンウィークを利用して完成させることを目指して、やることにしました。

みんなへの連絡は基本的にメールで行い、作業は休日の半日2~3時間の範囲で実施する。参加は個人の意思に任せ、特に参加確認を取らない。おしゃべりだけの参加、差し入れだけの参加などどんな参加のしかたもOKと気軽な参加を基本とし、作業の間のおしゃべりタイムも大切な情報交換の場としました。



作業前の湿地のようす

今回の作業の基本は山際の水路と田んぼの畦の補修作業で、剣先スコップと体力に、土嚢袋などが必要でした。期間中に延べ20人(2回参加してくれたメンバーもあり)の参加で作業は完了し、湿地に水を張ることまででき、5月10日には森津の田んぼ水路からドジョウさんに移住していただきました。

今回できた湿地はクワイ湿地8・クワイ湿地9と名づけました。





ちょっと一休み



完成した湿地8・9

なぜ湿地作業なのか

田植えが始まって稲が生長する7月くらいまではコウノリは田んぼを主要な採餌場所としています。コウノリの野生復帰にとって、豊岡の農業が安定し安全な米づくりが広がっていくことが何よりも重要であることを基本としながらも、コウノリたちが一年間を通じて安全に安心して暮らしていける環境を整える必要があるように思えます。田んぼにえさ生物が少なくなったときや、繁殖期の大量の餌を必要とする時期などのことを考える必要があります。

私たちの基本的スタンスは、現場で考えそして人任せにしないで行動をする。農家でない自分たちにもできることがあるならばやってみる、です。湿地づくりがコウノリの野生復帰にとって有効であるだけでなく、湿地の中にたくさんの種類の生き物がいることを知ってからは豊かな環境の創造にとって湿地づくりが重要であると考えています。

私たちが目指す湿地は、ハチゴロウの戸島湿地のように大規模なものではなく、最小限の予算と労働力で継続的に維持管理できる、小規模で生き物の密度が濃く衛星のように広がった、たくさんの小規模湿地群です。

これは予算や労働力の問題もありますが、コウノリを豊岡盆地の特定地域に集中させないためにも必要なことです。現在はまだ、コウノリたちも豊岡盆地の中でより良い餌場を求めて試行錯誤の途中のように見えます。彼らにとって都合の良い場所があれば必ずやって来る段階です。市民にとってもコウノリを通して環境を考え行動する絶好のチャンスだと思います。

いくつかの課題

効率よく湿地を管理するために解決しなければならない課題があります。

- ① 湿地は畦水路を継続管理をしなければ維持できない。
- ② 周りの田んぼとのバランスを考慮しなければならない。農家の理解と協力が必要。
- ③ 生き物が豊かで密度の濃い湿地をつくり、管理するための知識と具体的技術の獲得。
- ④ たくさんの湿地を維持管理するためには多くの人手が必要。
- ⑤ 何よりも自主的に行動する市民の参加が必要

近道はありません。これらの課題に悩みつつ、できるところから取り組んで、気付いたら一歩前進というのが理想でしょうか。

(クイ湿地管理人 宮村 良雄)



「コウノトリに出逢える歴史の道ウォーキング」レポート

平成21年5月31日(日曜日)、豊岡市教育委員会主催で「コウノトリに出逢える歴史の道ウォーキング」がありました。

このウォーキングは、文化庁が主唱する『歩き・み・ふれる歴史の道』兵庫大会のプレウォークと位置付けられたもので、ハチゴロウの戸島湿地からコウノトリの郷公園まで、距離にして約15kmのコースを歩きました。

当日直前まで雨が降り続いていましたが、開会式のころにはすっかりあがり、途中からは青空ものぞかせてくれました。参加者は35名。コウノトリ湿地ネットのメンバーもスタッフの一員として参加、全員完歩し、気持ちのいい汗を流した一日でした。



1. ハチゴロウの戸島湿地～玄武洞

ハチゴロウの戸島湿地で開会式を行い記念撮影後、玄武洞出発の2班・3班はマイクロバスで一足お先に出発。15kmの1班は、まず玄武洞に向けて出発しました。湿地ネットの宮村^上さんに続いてそれぞれのペースで歩いていきます。

玄武洞では、整備中の玄武洞と青龍洞を現地の観光ボランティアに解説してもらいました。

2. 円山川堤防

玄武洞を出てからは、円山川の堤防を進みます。途中、対岸の県道にある電柱の上を2羽のコウノトリが行ったり来たり、まるで私たちと遊びたいかのようでした。また、行列のすぐ上を横切るコウノトリもいました。円山川河畔からはヨシキリの騒々しい鳴き声や、行列に驚いて飛び立つキジに出逢うなど、あらためて円山川の自然のすばらしさを感じ取りました。

3. 野上巣塔～久久比神社

予定していたコースに野上保護増殖センター前の巣塔が加わり、すぐそばの農道から湿地ネットが準備したフィールドスコープを覗き、成長著しいヒナを観察しました。

お昼は田鶴野公民館。3班はここがゴールです。

予定していた時間よりやや遅れましたが、続く大石りく遺髪塚に向けて出発しました。遺髪塚では、私が解説。次のコウノトリにまつわる久久比神社まで行くと、あと一息を残すだけになります。

久久比神社の解説は副代表で下宮区長でもある佐竹さんに神社の由来などを説明していただき、みな熱心に聞き入っていました。隣のククヒ湿地では、私たちを待っていたかのように2羽のコウノトリが採餌に飛来していました。

4. コウノトリの郷公園

ゴールのコウノトリの郷公園では、それぞれがコーヒーカーアイススクリームの半額券を受け取り、解散。ほんとうはここで最後の記念撮影をすることになっていたのですが、無事ゴールにホッとして忘れてしまうというハプニングのおまけつきでした。

今回初めて企画されたウォーキングですが、コウノトリが生息する円山川下流域の環境と、その環境が創造されるに至った地形の成り立ちなどを、「歩き・み・ふれて」感じとった一日でした。大げさかもしれませんが、私たちが次世代に残していかなければならないのは何であるかを、改めて考えさせられるきっかけづくりになったのではないのでしょうか。

(コウノトリ湿地ネット 松井敬代)



4～6月編

湿地内の緑が一雨ごとに広がって、山の緑と水面、空の色とが重なりいい風景になりました。

4月末にカワセミが湿地にやってきた時に、カメラマンの要望に応じて湿地汽水域に、止まり木として挿した桜の枝が、なんと芽吹いたのです。今では、周りを葦に囲まれて「止まり木だよ」と自己主張しながら溶け込んでいます。毎朝起伏ゲート見回りの時、その木に「がんばろうで」と挨拶するのが日課となりました。

管理棟には4月2日のオープン以来、6月末までに3844人の方が来館され、コウノリの成長を見守る方、飛ぶ姿に感動される方、被写体としてのコウノリに魅かれて、湿地作りや生き物のことを知りたくて・・・「想い」や「目的」は様々だけれど、初対面でも会話がはずんでいます。

コウノリは、いろいろな想いや、いろんな人とのつながりを広げてくれ、コウノリを見つめることによって生まれる会話、共有する時間は、「他者の命」に想いを馳せることにより、その人自身が本来の優しさを見つけて、心地よさがつながっていくからではないかと、管理棟勤めをして思うようになりました。

<巣立ちまでの来館者の声と、私の想い>

戸島の2羽のヒナも、大勢の方に見守られて巣立ちました。

4つの命が1つ消え、また1つ消えてしまったけれど、2羽の巣立ちの現実を来館者の方達と一緒に見つめてきました。

孵化が遅れた1つの命が育たなかったことは、自然なのかも・・・。「可哀想になあ」「元気なヒナを育てるためには仕方ないかな」と呟きの声。

3つの元気な命は、そのまま巣立ちへとつながるものと信じていました。「今年も3羽の巣立ちが楽しみだわ」「いつごろですか？」と心待ちの声。

この頃私は、管理者として給餌の質と量について悩んでいました。コウノリが健康に暮らせるためには、私達は何を(質)どのくらい(量)補ってあげればいいのだろう?(繁殖期に限り行っている朝夕の給餌)「多すぎる」「少ない」「コウノリをよく見て」「ワカサギは油が多すぎる」。皆がコウノリのことを考えての意見でした。だから余計に分からなくなり、私のなかでの多数決で4月末から給餌の量を減らしていました。「餌は足りているのですか?」「こんなにいい湿地があるのに給餌するの?」「野生に帰したのだから、給餌する必要はあるの?」の声多しです。

そんななかで、親鳥が巣を空けることが多くなり、5月6日に目撃した時は、私のせいで(給餌の量を減らしていたから親鳥が餌を探しに行き帰って来ないのではないかと)ごめんなさいと、泣きながら巣塔まで全力疾走。



「ヒナは大丈夫か？」「繁殖しなかったペアも可哀想だな」と、心配と同情の声。

「コウノトリをよく見て」がずっと心に残っていました。私の見ている限りではヒナを育てるには餌が足りていない（親鳥が巣に戻る間隔が長い。餌の吐き戻しが少ない）ようでしたので、6日の夕方から給餌量を増やしましたが、親鳥はそれから巣を空け15日の朝に再び同じことが起こり、1羽が死んでしまいました。

今でもはっきりと覚えています。その時の様子は、「自分の命を守ろうとするヒナ」と「繁殖に命をつなげたいペア」（戸島人工巣塔で営巣したい）との、命と命のぶつかり合いのようでした。このことをなぜ？と受け止めなければならないのでしょうか？

私は、親鳥がなぜ教訓をいかさずに、また巣を空けてしまったのか。餌が足りないからなのか、気まぐれの偶然なのか、そのことがずっと気になっています。

新聞を見てと、多くの方が心配して管理棟に来て下さいました。驚きと悲しみを共有し、誰もが2羽の巣立ちに希望をつなぎ、「初めて飛ぶ時は怖いでしょうなあ」「それ、それ」「上手、上手」「頑張れ！」ライブカメラを見ながら、一緒に飛んだり跳ねたりする方の声が響きます。

巣立ちの瞬間を見たいと多くの方が言われるのは、飛ぶ鳥の心を自分の心に映せる貴重な瞬間なのでしょうね。管理棟内では、皆の心がひとつになりました。

豊岡生まれのコウノトリ達が、それぞれの好きな土地を見つけて飛んで行き、飛来先の大勢の方と交流することも、野生復帰への取り組みの1つではないのでしょうか。

ハチゴロウの戸島湿地管理棟が、豊岡での拠点となれるように「つながり」を大切に、その中で得たことを発信していきたいと思っています。若くはないが・・・情熱で！を合言葉に。

（管理人 森 薫）

“ハチゴロウ” とにじかい

先人から受け継いだ大地が、ハチゴロウの縁で湿地公園となり、多くの人達の又、多くの動植物や昆虫類の憩いの場として生まれ変わり、併せて「嫁ごろしのたんぼ」が土地改良整備事業により、耕作のしやすい田畑となり関係者の方々に深く感謝をいたします。

平成16年の台風23号では、当地区も甚大な被害を受け、中途の土地改良整備事業も延び延びとなり、一時は重苦しい空気が流れておりました。そんな中、それまでに飛来していた野生のコウノトリ “ハチゴロウ” が餌場としていた戸島区に湿地公園を建設する計画が持ち上がり、当地区も賛同し、そして「ハチゴロウの戸島湿地」の誕生となりました。

今後、私達と湿地公園との関わり方、携わり方はまだまだわかりませんが、毎日眺める「ハチゴロウの戸島湿地」そして、山裾に流れる円山川、山中に繁ケヤキの紅葉等々・・・そんな景色を楽しみながら、この地域での共生者でありたいと願っております。

この地域をより希望のある地・域へと・・・。

近い将来、貴鳥とにじかいで乾杯できることを楽しみにしております。

（城崎町戸島 横田一博）



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

法人会員

豊岡市 木村電気商会 戸島営農組合 有限会社一景

個人会員

東京都 橋口英二郎 本田裕子 柳生博 神奈川県 西村文宏
 愛知県 橋本章 島根県 千代延哲也 鳥取県 澤田恭成
 兵庫県 神戸市 森信弘 姫路市 松岡節芳
 西脇市 松岡正美 養父市 上田篤
 豊岡市 大橋一成 熊原政子 田内ひとみ 濱田健治郎 平岡勇介 村山直康

(2009年4月16日～6月22日)

ありがとうございました。これからもよろしくお願ひいたします。



おもうこと

戸島湿地のヒナ2羽も無事6月9日と、11日に巣立ちました。本当は3羽の巣立ちを楽しみにしていたんですが、5月15日に1羽のヒナが別の個体に襲われ、死んでしまいました。いつも思うのですが自然界の不思議を垣間見たような気がしました。まだまだ、コウノトリのことを知っていきたく感じ、今のコウノトリ社会を勉強しなくてはいけないと思いました。

今、ハチゴロウの戸島湿地が面白くなってきています。いろいろな鳥がやってきます。いろいろな昆虫がいます。いろいろな植物が芽を出し、大きくなってきます。何をしようかこの湿地で、とワクワクします。子ども、大人関係なく湿地で大いに学び遊びましょう。



戸島湿地背後の木にとまるヒナ

(湿地ネット代表 横田登代子)

「編集後記」

つい昨年までは、どうやってコウノトリを増やそう、ペアがちゃんとできるだろうか、と心配していたのに、もはや、増えつつあるコウノトリの実態に、ついていけなくなりそうです。コウノトリたちは思っているかも。人間って本当に肝っ玉が据わってないねえ。こんなの、野生復帰のほんとに小さな一歩なのに、と。(宮村)